

## ①⑥ みちる会からみちる幼稚園へ 1949～1975(S24～S50)

みちる幼稚園は、戦後浄明寺地区婦人会の子供会活動が発展してできた幼稚園である。

戦後鎌倉の各地の自治会は活発な活動をし、浄明寺では1946年6月に婦人会が町内会から独立し設立、会長に後の市議会議員の宮本せつ子になった。会報「若竹」の創刊号には婦人会の中心メンバーである民俗学者の大藤ゆきが、婦人たちが手を取り合って「一人の人間として自立して社会へ目を向けていこう…婦人の地位向上と共に文化的向上を図るように力を合わせていこう…」と記している。同時に会の活動の一部として子供会を作り、「今後の日本建設の担い手である幼児の擁護と教育の一端にでも役立ちたいとの願いで始めた」とある。

子供会の活動は当初月1回を目標に母親達や青年連盟の協力の下に行われた。「若竹」の記録では、初めのころの参加者は70余名あり、46年のクリスマス会

には家族も参加し、子供達には手作りの人形やいろいろな玩具が贈られた。活動は子供達の保育にとどまらず歯科検診や健康相談、知能テスト、遠足などを行った。

「若竹」15・16号には、宮本せつ子による子供会に望んでいることが記されている。専門の保母をおくこと、週3回、朝9時から午後3時迄、低廉ではあるが有料にとある。その要望に添った「みちる会」が1949(S24)年誕生し、翌年「みちる会後援会」も設立された。町内会館で週3回保育をし、報国寺の境内を遊び場に使わせてもらった。

会員の江藤順子は「郷土的なものや文化的なもの、他の幼稚園や託児所には見られぬものがある」という。



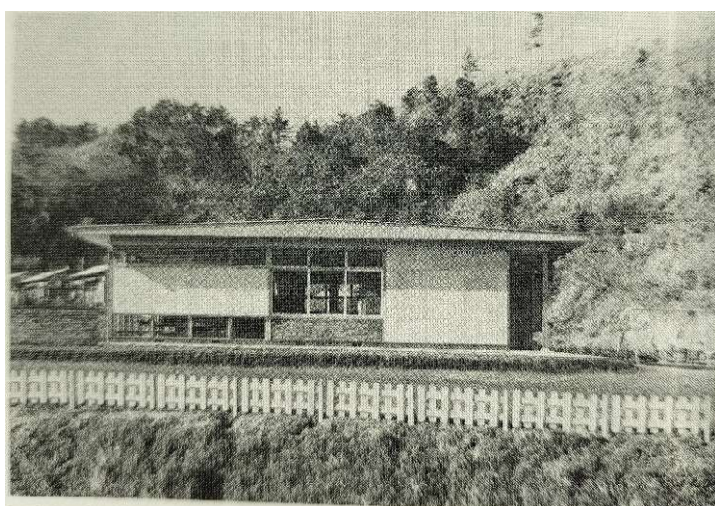
園庭だった報国寺境内での雪遊び  
(昭和29年1月25日、菅野勝衛氏撮影)

さらに希望としては毎日保育、時間延長、乳児もあずかり、設備も整った託児所ができたかと望んでいた。母親からは「安心して預けられる託児所があったら、どれだけ母親は休息と教養の時をとれるだろう」とある。

報国寺での運動会や第2小学校の運動会に参加したり、大仏・由比ガ浜へ遠足に行ったりしている。寒い間は各家庭から材料を持ち寄り、先生が作るなんでも入れる温かいみそ汁は、当時まだ食糧も豊かではなく、園児の心と体を温めるものであったと卒園生は語った。

1956(S31)年、念願の「みちる幼稚園」が誕生し、新しい園舎が泉水橋近くにできた。園長は当時成城大学学長であった宮本和吉がなり、後に妻のせつ子が引き継いだ。みちる会の精神は受け継がれ、J・J・ルソーの「子供の個性を尊重する」自由で開放的な保育・教育活動を行った。フジテレビの幼児番組「ピンポンパン」に園児一同が出演したこともあった。

20年間浄明寺地区の子供たちに素晴らしい保育活



西泉水（現在の5丁目）移転後の「みちる幼稚園」  
（武基雄作品集「杜の樹々」より）

動が続けられたが、隣接するハイランド地区に設備の整った「西武学園 かもくら幼稚園」が開園し、みちる幼稚園は75年閉園することになった。